河野裕一の事件簿　2殺目

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
河野裕一の事件簿　２殺目

【Ｎコード】
Ｎ６０４０Ａ

【作者名】
桂　ヒナギク

【あらすじ】
探偵の裕一は、幼なじみのジュンとスキー旅行へ遊びに行く・・・。しかし、そこで殺人事件が起こってしまう・・・。そして・・・。

プロローグ（前書き）

よぉ、久しぶりだな。
俺は探偵の河野　裕一。
前回は大堰川で災難にあってしまった。
今回は事件など起きなければ良いのだが・・・・。
それじゃあ、プロローグの公開だ。

プロローグ

５年前の福島県某所・・・。

此処に、トランプと言う系列の５３件目のレストラン・ＪＯＫＥＲがあった・・・。

このＪＯＫＥＲに、物語のメインである三人の仲良しコンビがいる・・・。

窓際に時遠（ときとお）　隆（たかし）、その隣に郡山（こおりやま）　初郎（はつろう）。

そして、向かい側に小島　猛（たける）が座っている・・・。

卓はプー、初郎は福島県警の刑事、猛は中学生だ・・・。

三人が楽しく食事をしていると、突然強盗が押し寄せて来た。

男：「おらおらおら、お前ら動くな！」

と、一人の男が金属バットを振り回しながら店内に進入して来た・・・。

続いて、もう一人、また一人と、計三人の強盗が入って来た・・・。

一人は、入り口で見張りをしていた・・・。

残る二人は、オドオドしている店員に「金を出せ」と要求した・・・。

しかし、店員は冷静になり、「お前らにやる金は無い」と言った。

すると、二人の強盗は急に暴れ出し、店内にいる客や店員を次々に巻き込んで行った。

一人、また一人と負傷者が増えていく・・・。

その時だった・・・。

一発の銃弾が暴れている一人に当たった・・・。

頭を銃弾が貫通して即死だった・・・。

そして、二度目の銃声・・・。

すると、もう一人の強盗犯の頭に銃弾が貫通し、その場に倒れ息絶えた・・・。

撃ったのは、初郎だった・・・。
入り口にいる強盗犯は、焦ってその場から逃げ出した・・・。
そして、時遠がそれを追いかけた・・・。
しかし、若い女が運転する車で犯人は逃走・・・。
この女も共犯だろう・・・。
時遠は、途中まで追いかけたが、見失ってしまった・・・。
そして、犯人は捕まらず、５年余りの月日が流れた・・・。

プロローグ（後書き）

えぇ、今回のストーリーは、福島県のあだたら高原スキー場付近にある旅館で起きた事件と言う設定です。
また、今回から裕一の推理コーナーを無くし、皆様にも推理する機会を与えようと思うので、皆様も推理してみて下さい。
あ、その前にゲストの紹介をしよう・・・。
探偵の裕一君です。
裕一：「探偵の河野です。
今回、プロローグのゲストとして呼ばれました。」
はい、終了です。
裕一：「待てやこら！
俺の出番無えじゃねえかよ！」
君の出番はちゃんと用意してありますよ。
裕一：「本当か？」
はい、だって君は主人公ですから。
でも、余り騒ぐと、主人公変えちゃいますよ？
裕一：「それは困る・・・。」
どうでも良いけど、出番送れちゃうよ？
裕一：「あんたのせいだろ！」
それでは、次話から本文スタートです。

友人との再会（前書き）

事件は次話からですので、「兎に角事件！」の人は先へ行って下さい。
そして、ツッコミ担当は必ず読め！

友人との再会

此処は、福島県にあるあだたら高原スキー場・・・。
此処で、二人の男女がスキーを楽しんでいた・・・。
ジュン：「裕一君、スキー上手だね。」
裕一：「そう言う、ジュンだって上手いよ。
それより、もう時間だ・・・。
此処滑って旅館に戻ろう・・・。」
ジュン：「うん、解った！」
二人は、斜面を滑り降り、スキー場と旅館を行き来しているバスに乗り込んだ・・・。
バスは、スキー場を出発し、旅館を目指した。
旅館の名前は、越谷市立あだたら高原少年自然の家・・・。
何故、越谷市立なのかは不明だが、そんなの今はどうでも良い。（因みに、作者は小学校の林間学校で行った事があります。ってこれもどうでも良い・・・。）
時間にして１０～２０分だろうか・・・。
バスは目的の旅館に到着した・・・。
バスが停車し、扉が開く。
そして、皆一斉にバスを降りた。
中には急いで旅館に入る人もいた・・・。
結局、最後に降りたのは、裕一とジュンの二人だけだった・・・。
裕一：「夕食ぎりぎりだな・・・。
着替えて食堂に行こうか。」
ジュン：「うん♪」
二人は旅館に入館した・・・。
二人が入館して数分が経過しただろうか・・・。
外はだいぶ吹雪いて来た・・・。
この程度だと、当分の間は旅館への出入りは出来ないだろう・・・。

二人は部屋で着替えていた・・・。
しかも一緒に・・・。
普通なら別々に着替える物だが二人の仲なのでそんなのはお構いなし。（正直、作者としては羨ましい。）
ジュン：「あれ、私のジーパンは？」
と、ジュンがジーパンを捜す。
まさか、無くしたのか？
裕一：「ジーパンがどうした？」
ジュン：「あたしのジーパンが見あたらないの・・・。」
裕一：「そこに掛かっているのは違うか？」
と、裕一が指を差して言う。
ジュン：「あ、あんな所に・・・。
裕一君、悪戯（いたずら）したでしょ？」
裕一：「バーロ、おめぇが自分で掛けてたんだろ？
雪の上で転んだの理由にさ・・・。」
ジュン：「あれ、そうだっけ？
てか、まだ乾いてないんだけど・・・。」
裕一：「こんな寒いのに直ぐ乾く訳ねぇだろ。
それに、部屋には加湿器があるし・・・。」
ジュン：「これじゃあ履く物が無いじゃない。」
裕一：「履かなくて良いよ？」
裕一、それはいくら何でもまずいんじゃないか？
ジュン：「え、今なんて？
履かなくて良いとか何とか・・・。」
言わんこっちゃ無い・・・。
裕一：「俺、そんな事言ったか？」
ジュン：「言ったじゃない、馬鹿！」
と、言いながらジュンの回し蹴りが飛んでくる。
裕一は、間一髪の所で避けた。
裕一：「さ、流石空手部主将（さすがからてぶしゅしょう）・・・。

って、当たったらどうすんだよ！？」
ジュン：「あら、私は何もしておりませんわ。」
出た、お嬢様気取り・・・。
裕一：「あ、そう・・・。
それより、俺の替えのズボンでも貸してやろうか？
今ならベルトセットでレンタル料１０，０００円、お得だよ？」
おいおい、１万って・・・。
お前は貸し屋か！？
ジュン：「１０，０００か・・・。
ちょっと高いわね。
せめて、０円に。」
そんな無茶な。
てか、お前まで話しに乗ってんじゃねえ！
裕一：「乗りが良いな。
でも、ツッコミがねぇのはどうかと・・・。」
作者の俺が突っ込んでます！
てか、そんなにジュンのツッコミが欲しいなら望みを叶えてやる。
（作者としては嫌だが、しょうがない・・・。）
さて、３０秒程を時間戻して・・・。
ジュン：「１０，０００か・・・。
って、金掛かるんならいらないわよ！」
と、今度はアックスボンバーが飛んできた・・・。
「ボカッ」と、鋭い音がした・・・。
裕一：「な、ナイスツッコミです・・・。」
と、こんな事をしてると、食事の時間が終わってしまうので、作者の都合により、ジュンのジーパンを乾かしておこう・・・。
ジュン：「さて、ジーパンも乾いた事だし、履いて食堂に行きますか。」
裕一：「早っ、もう乾いたの！？」
ジュン：「何か、奇跡が起きたみたい・・・。」

奇跡じゃねえよ！
設定を変えたんだよ！
ま、どうでも良いか・・・。
一方、食堂では・・・。
雄介：「（はぁ・・・可愛い女の子はいなかなぁ・・・。）」
と、そんな事を考えていた・・・。
彼の名は、二宮（にのみや）　雄介（ゆうすけ）。
今まで、女の子と付き合った事さえ無い可哀想な男だ・・・。
裕一とジュンの二人は、食堂に向かっていた。
ジュン：「この案内図によると、食堂は地下みたいだよ。」
裕一：「じゃ、この階段を下りた所だな。」
二人は階段を下りて行った・・・。
食堂に着くと、既に数人の宿泊客が集まっていた・・・。
ざっと見て、１１人だろうか・・・。
ジュン：「あそこの席が空いてるよ。」
と、ジュンが指を差して言った。
入り口から見て右側の席だ・・・。
裕一：「じゃあ俺、飯取って来るから先に座っててよ。
何か、セルフサービスみたいだしさ・・・。」
ジュン：「解った。」
と、ジュンは席に着いた。
その時、一人の男がジュンに声を掛けた・・・。
雄介：「君、可愛いね。
名前は？」
しかし、ジュンはシカトをした・・・。
雄介：「無視（シカト）はひでえんじゃねえか？」
ジュン：「あの、貴方は何なんですか？
私を難破（なんぱ）しようとしてるのかしら？」
雄介：「と、とんでもない。
僕はただ、貴方の様な可愛い女の子と友達になりたくて・・・。

その、つい声を掛けてしまったと言うか何というか・・・。」
と、そこへ飯を持った裕一が声を掛けた。
裕一：「お前！
俺のジュンに手ぇ出すとは一体ナニサマのつもりだよ、おい。」
雄介は慌(あわ)てて振り向いた。
そして、こう言った・・・。
雄介：「この子は、お前みたいな餓鬼とは別れ、今から俺と付き合うんだ。
邪魔しないでくれ。」
ムカ、ムカムカ。
非常にムカ付く男だ。
此処は作者として・・・。
裕一：「いや、別に付き合ってないし。
てか、別れるとかそう言う問題じゃないから！」
え、そうなの？
ジュン：「ゆ、裕一君・・・。
お・・・お願い・・・この・・・変な奴を追っ払って・・・。」
と、言いながら泣き出してしまった・・・。
女の子を泣かすとは、最低な野郎だな。
裕一：「男にはしてはいけない事が二つある。
女の子を泣かせる事と食べ物を粗末にする事だ。
お前は最低な野郎だ・・・。」
ん、このセリフ、何処かで・・・。
てか、今格好良くなかった？
雄介：「ん、お前・・・。
どこかで会った事ねぇか？」
何を言っている？
裕一：「さぁな。
会ったとしても、お前みたいな最低な野郎とは会話などしたくは無いね。

とっとと失せな！」
雄介：「お前・・・もしかして、裕一か？
そのキザな喋り方と言い、性格と言い・・・。
多分、裕一だろ。」
裕一：「そう言うお前は誰だ？」
雄介：「何だ、忘れたのか・・・。
俺だよ、中学時代の友達の雄介だよ！」
裕一：「雄介？
二宮　雄介か？
あの、小学校5年までおねしょしており、頻繁に遅刻していたあの
雄介か？」
雄介：「やっと思い出したか。
って、おねしょと遅刻はしてねぇよ！」
裕一：「いや、してたろ・・・。」
雄介：「相変わらず人をからかう性格は治っていない様だな全く・・・。」
裕一：「全く・・・面白い奴だ。
面白くてからかいがある・・・。」
おいおい・・・。
ジュン：「どうでも良いけど、ご飯さめちゃうよ？」
裕一：「お、そうだったな。」
雄介：「ちょっと待て！
せっかくの友達との再会なんだ。
もっと色んな事話そうぜ？」
裕一：「勘違いするな、俺とお前は友達じゃない。」
つ、冷めてぇ・・・。
雄介：「酷い。
俺、お前の事、友達だと信じてたのに・・・。」
裕一：「友情とは、友の心が青臭いと書く。
余り人を信用するな・・・。

さて、冷める前に食べようぜ。」
ジュン：「うん♪」
向かい合って座った二人は、食事を始める・・・。
てかこのセリフ・・・。
裕一：「雄介、お前は食べないのか？」
雄介：「いらねーよ。
食欲失せたしな。」
裕一：「食べると言う字は人が良くなると書く・・・。
食べないと力付かないし、元気にならないぞ？」
ん、このセリフもどこかで・・・。
雄介：「誰のせいだと思ってんだ？」
裕一：「お前のせいだろ・・・。」
ひでぇ・・・。
まぁ、確かにそうだけど・・・。
雄介：「あぁあ、あんなに楽しく食事してやがる・・・。
よぉし、こうなったら俺も、自分の理想の彼女を見つけてやる！」
裕一：「お前じゃ無理だな・・・。」
と、裕一が突っ込む・・・。
カチンと、固まる雄介・・・。
と、その時だった・・・。
「バチッ」と、いきなり電気が消えたのだ。
ジュン：「ゆ、裕一君。
こ、怖いよ・・・。」
裕一：「何、心配すんな、俺が付いてる。」
ジュン：「裕一君、ありがとう♪」
と、興奮するジュン・・・。
こんな暗い中で良く興奮出来るよ・・・。
と、作者は思った・・・。
その時、「う・・うう・・う」と、誰かの呻き声が聞こえ、「ドスッ」と、何かが倒れる音がした。

友人との再会（後書き）

友人との再会はどうでしたか？
笑えました？
此処は敢えて全てウケ狙いで来たんですが、駄目ですかね？
では、次話の事件編をお読み下さい。

スキー旅行殺人事件！（前書き）

この回から事件発生です。
一応、本格ミステリーのつもりです・・・。
えぇ、前話は「友人との再会」だったよね？
裕一：「そうだけど？」
本文では「友達じゃない」とあったけど、裕一君は、雄介の事、友達と思ってるのかな？
裕一：「誰があんな奴！」
冷たっ！
って事で、ストーリースタート！

スキー旅行殺人事件！

音が聞こえた後、暫くして電気が点いた・・・。
すると、「キャー！」と言う悲鳴が聞こえた。
悲鳴の聞こえた方を向くと、男が背中を刺されて倒れていた・・・。
裕一は、男に近づいた・・・。
男は、かすかに息があった・・・。
裕一：「何があったんですか！？」
男は、死に際にメッセージを残した・・・。
背中を刺された男：「は・・・は・・・犯・・・人・・・。
J・・・O・・・K・・・E・・・R・・・。」
と・・・。
そして、男はそのまま息絶えてしまった・・・。
裕一：「J　O　K　E　R・・・JOKER（ジェイ・オー・ケイ・イー・アール）！」
裕一は、思わずそう叫んだ・・・。
男：「警察だ！
一体何があった！？」
おやまぁ、早いお着きで・・・。
男：「おい、そこで何をしている！？」
裕一：「何もしてませんよ。
まぁ、強いて言えば、被害者が息絶える瞬間を見てました・・・。」
森本警部補：「俺は、福島県警捜査一課の森本　大次郎警部補だ・・・あんたは？」
裕一：「河野　裕一・・・探偵です。」
森本警部補：「え、河野　裕一ってまさか！？」
女性：「あの有名な！？」
男性：「どんな難事件でも朝飯前の！」
女性：「名！」
男性：「探！」

森本警部補：「偵！」
女性・男性・森本警部補：「河野　裕一！？」
此処だけ何故かハモってる・・・。
てかお前ら何！？
驚きすぎだって！
女性：「キャーッ、サインしてサイン！」
おいおい、大丈夫かよ？
てか、事件が起きてるって言うのに良く平気でサインが欲しがれるな・・・。
男：「おいおい、食事中に何の騒ぎだ？」
と、右の目の上に黒子（ホクロ）がある男が食堂に入って来た・・・。
森本警部補：「あ、初郎（はつろう）警部！」
初郎警部：「一体何の騒ぎだ？」
森本警部補は郡山に今起きた事を話した・・・。
初郎警部：「何！？
それで、遺体には誰も触れてはいないだろうな？」
森本警部補：「勿論、彼一人を除いては・・・。」
初郎警部：「・・・・・・。
こらぁっ、遺体には誰も触らせるなと何時も言ってるだろぉが！」
森本警部補：「はい、今度から気を付けます・・・。」
初郎警部：「もう良い！
で、あんたが遺体に触れたと言う奴か？」
初郎は、そう良いながら裕一に近づいて来た。
裕一：「そうですが何か？」
初郎警部：「『そうですが何か？』じゃないっ！
一般者は遺体に触れるな！
兎に角、貴様には署に連れて帰ってじっくり話を聞かせて貰うとしよう。」
裕一：「外は吹雪いてますよ？
多分、当分の間は出入りは不可能・・・。

勿論、犯人が逃げる事も不可能。
つまり、この旅館は今現在、密室です。」
初郎警部：「むむむ・・・そんな事は解っておる！
貴様、名は！？」
裕一：「名乗る程の者じゃないっす。」
初郎警部：「怪しい・・・。
被害者を刺したの、お前だろ！？」
じょ、冗談！
裕一：「そんな事して何の得になる？
別に利益など得られないでしょ。」
あらら、喧嘩が始まった・・・。
初郎警部：「五月蠅ーい！
兎に角、お前は殺人犯だ！
今此処で逮捕してやる！」
そう言って、初郎は手錠を取り出して裕一の手に掛けようとした・・・。

しかし、裕一が素早く手を引っ込めた為に、自分の手に手錠が掛かってしまった・・・。
初郎警部：「な、何故私の手に手錠が！？」
裕一：「情けない・・・。
なんとも惨(みじ)めな・・・。
そんな事より、良いんですか？
一人減ってますよ？」
初郎警部：「どういう事だ？」
本当にどういう事なんだ？
裕一：「人数ですよ。
さっき見た時は１１人いたのに、今は１０人・・・。
そして、貴方を入れて１１人・・・。
どう見ても可笑しいじゃないですか。」
森本警部補は周辺を見渡した・・・。

森本警部補：「確かに、後から来た警部を除けば一人減っていますね・・・。」
裕一：「それより警部さん、僕と以前にどこかで会ってませんか？」
初郎警部：「君なんて知らんよ・・・。」
裕一：「あ、思い出した！
京都で会ったんだ！」
初郎警部：「あぁ、あれは私の双子の弟の次郎だ。
ほら、左の目の上に黒子があっただろ？
で、あんたが何故(なぜ)弟と面識があるんだ？」
裕一：「弟さんから僕の事を聞いて無いんですか？」
初郎警部：「私は何も聞いておらんよ・・・。」
裕一：「河野　裕一・・・それが僕の名前ですよ・・・。」
初郎警部：「何だ、例の名探偵か・・・。
それで、遺体に触れた時の感想は？」
はぁ？
裕一：「感想？」
初郎警部：「あぁ、探偵な死亡推定時刻とか解っているんだろ？」
裕一：「えぇ、まぁ・・・。
死亡推定時刻はＰＭ．７：３０頃です。
丁度、停電が起きたのがその頃ですから・・・。」
初郎警部：「ほぉ、成る程・・・。
それで、他には何か？」
裕一：「被害者が死に際にＪＯＫＥＲと・・・。」
初郎警部：「ＪＯＫＥＲ！？
本当にそう言ったのかね！？」
裕一：「ＪＯＫＥＲについて何か心当たりでも？」
初郎警部：「あぁ、いや、私は何も知らん！」
初郎は、慌てて現場を去ってしまった・・・。
あの様子では何か隠しているな・・・。
森本警部補：「何だ、あの駄目警部・・・。

ＪＯＫＥＲと聞いたとたんに慌てて出て行ってしまった・・・・。」
裕一：「森本警部補？」
森本警部補：「どうしました？」
裕一は指を差して「後」と一言・・・・。
森本は、後を振り向いた・・・・。
森本警部補：「あ、初郎警部！？
いらしたんですか！？」
初郎警部：「森本君？
君は私の事をそんな風に思っていたのかねぇ？」
森本警部補：「あ、いや・・・私は決してそんな・・・・！」
その時、裕一の脳裏にはある事が蘇った。
初郎警部：『ほら、左の目の上に黒子があっただろ？。』
裕一：「あぁ！
あんた、福島県警捜査一課の郡山　初郎警部の双子の弟の京都府警捜査一課の郡山　次郎警部！
貴方が何故こんな所に！？」
コイツ、次郎さんだったの！？
てか長！
次郎警部：「あ、バレちゃった？
実は、女房とスキー旅行に来てるんだ。」
皆さんは彼を覚えているだろうか・・・・。
彼は、以前に大堰川殺人事件の時にご一緒した京都府警の郡山警部だ。
確か、裕一のお袋の上司だった様な・・・・。
裕一：「へぇ、警部って奥さんいたんですか・・・・。」
次郎警部：「いたら悪いか！？」
裕一の事だ。
悪いと答えるだろう・・・・。
裕一：「悪い・・・・。
てか、黙ってる方がもっと悪い。」

何だそれ？
人のプライベートな事情を他人に教えるか普通？
次郎警部：「だからって、君に教える義務は無いよ。」
ジュン：「あの、お取り込み中で悪いんだけど、事件の捜査しなくて良いの？」
裕一：「あ、いっけねえっ！
すっかり忘れてた！」
それで良いのか、名探偵！？
ジュン：「もう・・・。
探偵が聞いて呆れるわ・・・。」
裕一：「五月蠅いな・・・。」
ジュン：「はいはい、今は捜査捜査。」
あぁ、先が思いやられるわ・・・。
裕一は、その場にいたシェフに凶器の事を聞いた。
すると、シェフは「肉を切る時に使っているナイフだ」と答えた。
食事に使う食器具を凶器にするなんて・・・なんて下劣な奴なんだ。
許せない・・・。
裕一：「（それは俺も同じ気持ちだ・・・。）」
え、作者の声が聞こえてるの？
って事で次話へ！

スキー旅行殺人事件！（後書き）

はい、一応、事件発生の話が終了しました・・・。
次話からは、「裕一とジュンの秘密」に迫ります！
裕一：「迫らねえよ！
次話は、ＪＯＫＥＲの謎に迫るからな！
間違えるなよ！
特に作者！？」
え、俺・・・？
ジュン：「そうよ！」
マジかよ！？
てか、何でジュンがいるの！？
俺、呼んで無いよ！？
裕一：「俺が呼びました。」
作者の許可無しに呼ぶな！
裕一：「では、次話スタート！」
おい、人の話は最後まで聞けって！
って事で、次話へＧＯ！

ＪＯＫＥＲについて（前書き）

はい、この回では「裕一とジュンの秘密」では無くて、「ＪＯＫＥＲについて」をやります。
では、小説スタート！

ＪＯＫＥＲについて

次郎警部：「それより、私の兄は何処に？」
裕一は、次郎に「先ほど出て行った」と説明した・・・。
次郎警部：「出て行ったのか・・・。
でも、何で出て行ったんだ？」
裕一：「ＪＯＫＥＲと聞いたら、慌てて出て行ったよ。
理由は知らん。」
次郎警部：「ＪＯＫＥＲねぇ・・・。」
裕一：「何か心当たりでも？」
次郎警部：「いや、無いけど・・・。」
次郎さん、怪しいよ？
めっちゃ怪しいよ？
裕一：「まぁ、取り敢えず、遺体の身元でも確認しておきましょうか。」
森本警部補：「そうですね。
次郎さん、手伝って貰えます？」
次郎警部：「それなら結構ですけど？」
裕一：「では、お願いしますよ。」
三人は遺体の身元を証明する物を捜した・・・。
だが、ろくな物は見つからなかった。
それどころか、部屋のカギ以外は何一つ出て来なかった・・・。
と、そこへ、見窄（みすぼ）らしい青年が声を掛けて来た・・・。
裕一：「どうしました？」
見窄らしい青年：「あ、あの・・・僕・・・その・・・。
ひが・・・被害者の・・・な・・・名前・・・し・・・知ってます・・・。」
やけに緊張してるな・・・。
裕一：「何と言う名前ですか？」

猛「あの、僕、小島　猛(たける)と言います・・・・。」
いや、そうじゃなくて。
裕一は被害者の名前を聞いてるんだけど・・・・。
猛：「あ、す・・・すみません。
被害者の名前ですよね・・・・。
被害者は、時遠(ときとお)　毅(たけし)です・・・・。」
時遠　毅？
あのプロローグに出てきた？
裕一：「ほぉ、時遠さんですか。
その時遠さんと、貴方はどういう関係ですか？」
そうだ、どういう関係だ！？
猛：「時遠さんは、僕の命の恩人なんです。」
それはまたどういういきさつ？
猛：「僕、１０年前に、暴漢に襲われてる所を、時遠さんに助けて貰ったんです・・・・。」
それで？
猛：「それ以来、僕と時遠さんは仲良くなったんです・・・・。」
ほぉ、成る程・・・・。
裕一：「成る程・・・・。
所で、時遠さんとは、どんな感じの人だったんですか？」
猛：「時遠さんは、真面目で良い人でした・・・・。
今日も、時遠さんと一緒に・・・・。
って、あれ？
郡山さんじゃないですか？」
次郎警部：「あの、私の事ご存知で？」
猛：「ご存知って・・・・。
郡山さん、時遠さんと親友だったじゃないですか！
５年前の夏だって、僕たちと此処に一緒に遊びに来たでしょ！？
忘れちゃったんですか！？」
次郎警部：「５年前？

何の話だね？」
その郡山って、初郎さんの事か？
裕一：「あの、その郡山さんってのは、初郎さんの事ですか？」
猛：「はい、そうです・・・。」
ビンゴ！
裕一：「（ビンゴ！）」
え？
次郎警部：「君は、初郎兄さんと知り合いなのかね？」
猛：「はい、それはもう、色んな意味で。」
どんな意味？
次郎警部：「色んなと言うと？」
猛：「だから、色んな意味ですよ。」
次郎さん、これ以上は何も聞けないと思うよ・・・。
猛：「そう言えば、初郎さんって、刑事なんですってね。
確か、５年前に会った時にそう言ってました。」
５年前？
猛：「初郎さん、５年前にあるレストランで強盗犯をやっつけた事があるんです。」
次郎警部：「強盗犯を？
何でまた？
ウチの兄貴は殺人事件を中心扱ってる人だよ？
それなのに何故（なぜ）強盗犯を？」
猛：「偶々ですよ、偶々。」
偶々・・・？
猛：「そう、あれは５年前の夏だったかな。
丁度その時、あだたらへ三人で遊びに来ていたんです。
それで、その帰りに立ち寄ったＪＯＫＥＲって言うレストランで偶然にも強盗事件に巻き込まれたんです。
当時、強盗は三人でした・・・。
そして、その三人の内の二人が店内で暴れたんです。

初郎さんは、回りの人をこれ以上傷つけない様にと、持っていた拳銃でその二人を撃ちました。
二人は、頭を銃弾が貫通して即死でした・・・。
残った一人は、逃走しました。
それを、時遠さんが追いかけたんですが・・・。
途中で見失ったんです・・・。」
と、その時。
入り口の方から「パァン！」と言う銃声が聞こえた・・・。
そして、次の瞬間には、小島さんがその場に倒れていた・・・。
裕一は、即座に入り口の方を向いた。
しかし、そこには誰もいなかった・・・。
小島の頭に、銃弾が貫通していた・・・。
幸い、意識だけは残っていた・・・。
裕一：「小島さん？
小島さん！？」
裕一は小島に話し掛ける・・・。
が、小島は、左前頭葉を撃たれ、言語障害が出ており、上手く喋れなかった・・・。
裕一：「（くっ、言語障害が出てる！）」
小島は、何かを言いかけた・・・。
猛：「Ｊ・・・ＪＯ・・・だ・・・。」
そして・・・。
「パァン！」
二発目の銃声が入り口の方から聞こえた・・・。
裕一は、今一度そちらを向いた・・・。
しかし、今度も誰も見つからなかった・・・。
ＪＯ・・・。
恐らく、小島が言い残したかったのはＪＯＫＥＲの事だろう・・・。
だが、言語障害が起きていて喋れなかった・・・。
まぁ、そんな所だろう・・・。

裕一：「（同感だ・・・。）」
え、また作者の声が聞こえたの！？
不思議な奴だな、全く・・・。
コイツはいつかとんでもないビッグな奴になるかもしれない・・・。
今はそれを見届けてあげよう・・・。
裕一：「あ、まずい！
このままでは非常にまずい！」
何がまずいのだろうか・・・。
森本警部補：「河野君、何がまずいの？」
裕一：「犯人は、ＪＯＫＥＲと言うレストランの関係者かもしれない。
だとすると、初郎さんが危ない！
もしかすっと、もう手遅れって可能性もある！
兎に角、初郎さんを捜そう！」
ほぉ、そう言う事か・・・。
だが、手遅れでないと作者にとっては不都合なんすよね・・・。
って事で、次話へ！

ＪＯＫＥＲについて（後書き）

はい、ＪＯＫＥＲについてが終了しました。
って事でゲストの木之本　ジュンさん、ご感想を・・・・。
ジュン：「作者さんって、何かやりたい放題よね・・・・。」
はい、だって作者は神同等ですから・・・・。
だからこんな事も出来るんですよ。
裕一：「ジュン、俺はお前が好きだ。」
ジュン：「私も、貴方が好きなの・・・・。
って、何さらすんじゃい！
恥ずかしいじゃんか！？」
何か、キャラ変わって無い？
って事で、次話は第三の事件です。
次話はウケ狙いで行きますんで宜しく！
要するに、小説内に第四者（作者）の介入ですね。
それじゃ、二人はそこでいちゃいちゃしてなさい！
ジュン：「こら、話はまだ終わってねぇ・・・・って、裕一君！？
やめてぇーっ！」
んじゃ、さいなら！

第三の殺人（前書き）

出だしからいきなりウケ狙いです。

第三の殺人

三人は、初郎さんを探していた・・・。
裕一：「（初郎さん・・・何処だ！？
何処にいる！？）」
初郎さんを捜す中、刻一刻と時間だけが過ぎて行く・・・。
初郎さんを探し続けて３０分。
裕一達三人は合流して食堂に戻った・・・。
ジュン：「初郎さんは？」
裕一：「いや、見つからなかったよ・・・。」
雄介：「ちゃんと捜したのかよ！？」
裕一：「捜したさ・・・。
だけど、見つからないんだから仕方ないじゃないか！」
それは確かにそうだ・・・。
裕一：「理由は知らんが、作者の都合でそうなってるみたいだしさ・・・。」
貴方は直ぐに人のせいにするのですか？
って、何で作者の存在をお前が知ってるんだよ！？
作者は神同等！
あり得ないだろ普通！？
ジュン：「それじゃあ、仕方ないわね・・・。」
お、お前までコイツの言う事信用するのか！？
友情とは友の心が青臭いと書く・・・。
そんな簡単に友達を信用して良いのか！？
それで良いのか、小説の住人！？
ジュン：「ねぇ、作者さん？
真面目にやる気あるの？」
だから、何でお前らが作者の存在を！？
てか、お前らは神同等の作者の支配下にあれば良いの！

って事で話を戻そう・・・。

すると、突然「キャー！」と言う女性の悲鳴が聞こえた・・・。

裕一達は、悲鳴の聞こえた方へと駆けつけた。

裕一は悲鳴の主を見つけた・・・。

悲鳴の主は、部屋の前で腰を抜かしていた・・・。

裕一：「どうしたんですか？」

女性：「お、お、夫が！

夫が首を吊って死んでいるんです！」

女性が指を差して言った。

女性が差した方向を見ると、初郎警部が首を吊って死んでいた・・・。

裕一：「は、初郎さん！？」

裕一は、初郎さんの様子をジッと見た・・・。

森本警部補：「河野君、何をやっているんですか？

早く警部を降ろしてあげないと・・・。」

そうだ、何をやっているんだ、日本の救世主！

裕一は、森本に言われて我に返った。

裕一は、森本と一緒に遺体を降ろした・・・。

裕一：「初郎さん・・・。」

その時、裕一は初郎さんの服から何かが飛び出しているのが見えた。

裕一はそれを取って読んだ・・・。

それには、こう書いてあった・・・。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

時遠さんと小島さんをやったのはこの私、初郎です。

動機は５年前のＪＯＫＥＲと言うレストランでの強盗事件です・・・。

あの時、私と時遠と小島さんは強盗事件に巻き込まれました。

その時の三人の内の二人の犯人を、私は銃殺しました・・・。

当初は、あの時逃げた犯人・・・次郎を殺害して犯人に仕立てあげ
ようと思いましたが、バレたらどうしようと言う気持ちが強すぎて、
殺害出来ませんでした。
なので、私が代わりに死んでお詫び致します・・・。

　　　　　　　　初郎。

――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――
成る程、遺書って訳か・・・。
裕一：「奥さん、遺体を発見した時、現場はどんな状況でした？」
麗子：「郡山　麗子と申します。
当時の現場の状況ですね？
ええと、カギが掛かっていました・・・。」
カギが掛かっていた？
と言う事は、密室か！？
もしこれが殺人なら、完全な密室殺人になる！
ん、そう言えば、麗子さんは何故、「初郎」に突っ込まないのか？
いや、それ以前に何故次郎？
ま、まさかな・・・。
裕一：「本当に初郎さんが犯人なのだろうか？」
森本警部補：「どうして？」
裕一：「だって、自殺にしては、不自然過ぎるし、遺書に次郎さん
名前が出てきたのも気になる・・・。」
森本警部補：「そう言えば・・・。」
次郎：「何が不自然なんだね？」
裕一：「踏み台。
自殺する際に使った台が無いんですよ・・・。
恐らく、あれは自殺では無い！」
と、裕一が断言する・・・。

裕一：「あ。
麗子さん、遺体を発見するまでは何処に？」
麗子：「お風呂に入ってましたわ。
だけど、何か胸騒ぎがしたので、上がって部屋に戻ったんです・・・・。
そしたら、こんな事に・・・・。」
成る程・・・。
そして、裕一達は食堂に戻った・・・・。

初郎の不自然な自殺

ＰＭ．９：００・・・。
裕一は、初郎の死に疑問を持っていた・・・。
なんでも、自殺する際に使った台が無かったからだ。
裕一：「（もう一度現場へ行ってみるか・・・。）」
裕一は、現場に移動した・・・。
現場は、状況を保存する為に、ｋｅｅｐ　ｏｕｔの黄色いテープが貼られていた・・・。
裕一：「（そう言えば、現場は密室って聞いたな・・・。）」
裕一は、現場を一通り見た・・・。
裕一：「（さっきは、ハッキリと見なかったからな・・・。今此処で見ておこう・・・。
ん、待てよ・・・。
そうか、解ったぞ！
あの時、現場にカギは掛かっていなかったんだ！
間違い無い、犯人はあの人！）」

裕一は、食堂の入り口にいた・・・。
ジュン：「ねぇ、何か見つかった？」
話し掛けて来たのはジュンだった。
裕一：「まあな！」
ジュン：「何を見つけたの？」
裕一：「犯人の正体さ・・・。
ん、壁に何かの跡が・・・。」
裕一は、壁に何かの跡を見つけた。
裕一：「（べたべたしてる・・・。
此処に何か貼ってあったのか・・・？）」
何かが貼ってあった。

一体、何が此処に・・・？
裕一は、ある事を思い付いた。
裕一：「（此処で銃声が鳴った・・・。
と言う事は・・・。）」
裕一は、森本の所へ向かった。
森本警部補：「河野さん、どうしました？」
裕一：「警部補にお願いがあるんですよ。」
と、裕一は森本の耳に口を近づけ・・・。
裕一：「実は、・・・・・・で、・・・・・・・を。」
森本警部補：「ちょ、そんな無茶な要求！？」
裕一：「三人を殺した犯人が解ったんです！
だから、とにかくお願いします！」
森本警部補：「解りました。
そういう事なら手伝いましょう！
大船に乗ったつもりでいて下さい！」
そう言うと、森本は急いでどこかへ駆け出して行った・・・。
裕一は、こんな事して良いのかと、少し迷っていた・・・。
裕一：「（さて、後は・・・。）」

停電トリック

裕一はフロントに来ていた。
裕一：「すいません、ブレーカーはどこにあるんですか？」
フロント：「ブレーカーなら地下にありますよ。」
裕一：「その詳しい場所を教えて貰えませんか？」
フロント：「じゃあ、ちょっと待ってて・・・・。」
フロントの係りは、物置に入って行った・・・・。
そして、２０秒ほどすると、物置から出てきた。
フロント：「ええと、これが館内の地図で、此処が今いる・・・・。」
と、ブレーカーのある所を説明している・・・・。
裕一：「（お風呂場か・・・・。）」
裕一は、お風呂場に移動した・・・・。
裕一：「（えっと、お風呂場の浴槽掃除用具室の中にあるんだったな・・・・。）」
裕一は、それらしき部屋を見つけると中に入った。
室内は、掃除用具ばかりが置かれていた・・・・。
辺りを見回すと、ブレーカーが入り口の扉の真上にあった・・・・。
裕一は、傍にあった脚立を置いて上った。
ブレーカーを見ると、主電源の所に白い塊が見えた・・・・。
裕一は、白い塊に触れた・・・・。
裕一：「（接着剤！？）」
何故こんな所に接着剤の跡が？
そう思った裕一だったが、その疑問は直ぐに晴れた。
裕一：「（ん、さっきは気づかなかったけど、扉の前が濡れてる・・・・。
そう言えば、この部屋には水道があるな・・・・。
あっ、そうか！
解ったぞ、ブレーカーが切れる仕掛けを作った犯人が！）」

裕一は、急いでその場を離れると、フロントへ向かった。
裕一：「すいません！」
フロント：「な、何ですか、そんなに慌てて・・・。」
裕一：「停電が起きた時、フロント前を通った人っている？」
フロント：「停電が起きた時？
確か、破れたビニール袋とホースを持っていた女性が通ったよ。」
裕一：「それ、間違いない！？
ちゃんと証言できますか！？」
フロント：「えぇ、出来ますよ。
顔をはっきり見てますし・・・。」
裕一：「じゃあ今すぐ食堂へ来て下さい！」
フロント：「はい！」
二人は、食堂へ向かった・・・。
裕一：「ジュン、頼みがある！」
ジュン：「え、何、頼みって？」
裕一：「事件当時に食堂にいた人全員を今すぐ集めてくれないか！？
事件の真相が解ったんだ！」
ジュン：「あら、そう・・・。
じゃあ集めてくるから待ってて・・・。」
そういうと、ジュンは宿泊客を集めに行った・・・。
そして、入れ替わりに森本警部補が戻って来た。
森本警部補：「河野さん、例のあれ。
やっておきましたよ。」
裕一：「そうですか・・・。
あ、ついでだから、もう一つ頼まれて下さい。」
森本警部補：「今度は何ですか？」
裕一は、森本の耳に口を近づけて言った。
裕一：「・・・・・・をお願いします。」
森本警部補：「解りました。」
そう言って、森本はまたどこかへ行った・・・。

事件の真相

ジュン：「裕一君、皆を呼んで来たわ！」
と、ジュンが事件当時に食堂にいた全員を食堂に連れてきた。
麗子：「夫を殺した犯人が解ったって本当ですか？」
裕一：「麗子さん、待って下さい。
首を吊って亡くなったのは、ご主人ではありません。
お兄さんの初郎さんです。」
麗子：「え、そうなのですか？」
裕一：「はい・・・。
ご主人は生きております。」
次郎警部：「あぁ、私ならちゃんと生きておる。」
麗子：「あ、あなた・・・。」
裕一は、事件の真相を語り始めた・・・。
裕一：「先ず、先に言わなくてはならない事。
それは、犯人がこの中にいる事です！」
麗子：「あら嫌だ。
怖いわ・・・。」
裕一：「驚くのはまだ早い。
犯人は二人います！」
次郎：「何だって！？」
裕一：「まず、被害者の小島　猛を殺害したのは、次郎さん、貴方です！」
ジュン：「それ、嘘でしょ！？」
裕一：「俺が今まで嘘言った事あるか？」
次郎：「ま、待ちたまえ。
何故、私が小島さんを殺害しなくてはならないのかね？
第一、証拠は？」
すると、「パァン！」と言う銃声が鳴った。

次郎：「銃声！？」
裕一：「そう、貴方はカセットテープに銃声を録音し、今みたいに鳴らしたのです。」
次郎：「そ、それじゃあ、拳銃は何処から？」
裕一は、遺体があった所を示すテープから入り口に直線状になる様にその位置に立った。
ジュン：「そこって、次郎警部がいた所じゃない？」
裕一：「そう、次郎さん。
貴方は此処で被害者を撃ったのです。
そのポケットの穴が何よりの証拠です！」
次郎：「こ、これは、虫食いの跡だ！」
と、誤魔化す次郎に・・・。
裕一：「では、その焦げ跡は何ですか？」
次郎：「煙草の跡だよ！」
裕一：「煙草ですか？
でもさっきは、『虫食い』、と言いましたよね？」
次郎：「言い間違いだ！」
裕一：「次郎さん・・・拳銃にも指紋と同じ様に、線条痕と言う物が残るんですよ。
なんなら、鑑識に調べて貰いましょうか？
小島さんの遺体を貫通した銃弾と次郎さんの撃った拳銃の線条痕をね！
それと、＋αで硝煙反応も調べさせて貰いますよ！」
次郎：「まだだ・・・。
まだ、謎が残されているのがある。
犯人は、小島さんを二回撃っている。
だが、犯人が銃を二発撃つとは限らない！
一発で仕留めれば二発撃つ必要は無いからな。」
裕一：「それは、二発撃ちたかったんですよ！」
次郎：「ほぉ、何故二発撃ちたかった？」

裕一：「5年前・・・ＪＯＫＥＲと言うレストランで強盗事件が起きました。（プロローグ参照）
当時、強盗犯は三人・・・。
そして、その内の二人が初郎さんの手によって銃殺されている・・・。
だから、貴方は二発撃つ必要があったんです・・・。
当時の二人の被害者が味わったのと同じ痛みを与える為にね！」
皆が騒ぐ・・・。
次郎：「面白い推理だ・・・。
だが、停電の時はどうなんだ？
犯人は何処にいて、何処へ逃げたんだ？」
裕一：「犯人は最初から食堂にいたんですよ。
停電が起きて、被害者の時遠さんを殺害するまでの間はね！」
次郎：「では、その後は何処に逃げたんだ？」
裕一：「食堂の外ですよ・・・。
そして、電気が点くのを待ち、点いたら何食わぬ顔で食堂に戻って来る・・・。
刑事としてね・・・。」
次郎：「私がやったと言ってるのか？」
裕一：「そうです！
しかし、時遠さんの時は、貴方一人での犯行は無理でした・・・。
だから、共犯者を使った・・・。
そして、その共犯者は・・・郡山　麗子さん、貴方です！」
麗子：「あ、貴方、何をおっしゃいますの！？
私は犯人ではありませんわ！
それに、私はお風呂に入っていたんだから、ブレーカーの入切は無理ですわ。」
裕一：「それが出来るんですよ・・・。
お風呂に入りながらタイマーを使ってブレーカーを落とす事がね・・・。

そろそろ停電が起きますよ・・・。」
すると、裕一の声に合わせて「バチン」と、電気が消えた・・・。
そして、直ぐに電気が点いた・・・。
麗子：「い、今のどうやったのよ！？」
裕一：「それは、仕掛けが来てから・・・。
お、噂をすればそれが来ましたよ。」
裕一が入り口に向かって指を差すと、森本警部補がテグスとホースとビニール袋を持って立っていた・・・。
麗子：「それが何だって言うの？」
裕一：「貴方が停電が起きた時に使ったトリックの材料ですよ。」
麗子：「あんな物でそんな事が出来るのかしら？
聞かせてちょうだい・・・。」
裕一：「警部補、宜しくお願いします。」
森本警部補：「良いですか？
先ず、このテグスの先端に接着剤を付けて、ブレーカーの主電源にくっつけます。
そして、このビニール袋をもう片方の先端に結び、ホースをビニール袋の中に差し込み、水道の蛇口を軽くひねります。
すると、水が徐々に溜まって行き、ビニール袋が重りに変わって、やがてブレーカーが落ちる仕組みになっています。
これが、停電のトリックです。」
成る程、あの時にいなくなったのはこの為だったのか。
麗子：「だからって、私がやったと言う証拠にはならないわ。」
裕一：「ブレーカーはお風呂場の入り口にある浴槽の掃除用具室がある部屋にあります。
あの時、貴方は初郎さんが亡くなった部屋で『お風呂に入っていた』と証言している・・・。
あの時刻に、お風呂場にいた貴方にしかこの犯行は不可能です。
それに、目撃者だっています！」
すると、目撃者がやって来て「あ、この人です！」と答えた。

麗子：「くっ、そんな馬鹿な！
目撃者がいたなんて！？
全て上手く行くと思っていたのに・・・。」
裕一：「麗子さん・・・。
初郎さんを殺害したのも貴方ですね？
動機は、５年前のＪＯＫＥＲの事ですね？」
麗子：「えぇ、そうよ・・・。」
裕一：「貴方は、５年前のＪＯＫＥＲの強盗犯を車に乗せて移動する運転手だったんじゃないんですか？
いや、そうでないと、あの時に追いかけた時遠さんが見失う筈がありません。」
麗子：「その通りよ。
全てはあの日から始まったの・・・。」
麗子は、５年前の強盗事件の事を語った・・・。
麗子：「私たちはお金に困っていたわ・・・。
それで、偶々見かけたレストランに止まり、三人が強盗に入ったわ。」
裕一：「それは、初郎さんが撃った二人と次郎さんですね？」
麗子：「そうよ・・・。
そして、二人が暴れたわ・・・。
そしたら、二人はその初郎に撃たれたのよ。
その時からだったわ・・・。
いつか、あの男共に復讐してやると誓ったのは・・・。」
裕一：「それで、今回の事件を思いついたと・・・。」
麗子：「えぇ、奴らの事は初郎が良く知ってたわ・・・。
私は初郎に酒を飲ませ、デロデロに酔わせてから聞いたわ。
そしたら、ベラベラとあの話を喋り始めたのよ・・・。
だから、私は夫と今回の事件を計画したのよ・・・。」
なんと、計画殺人だったのか！？
麗子：「後は、探偵さんの言う通りよ・・・。」

麗子と次郎は、その場に崩れた・・・。
森本は、その二人に手錠を掛けた・・・。
これで、ようやく事件が終わったな・・・。

事件の真相（後書き）

これで、事件が終了した訳ですが、河野さんは今回の事件はどうでした？

裕一：「・・・・・・・。」

河野さん？

どうしたんですか？

あ、解った。

ナレーターの私が本編で君たちと会話したから怒ってるんでしょ？

裕一：「え、何？

御免、今寝てた・・・・。」

何！？

作者の前でそんな失礼な態度を取るとは良い度胸だ！

裕一：「え、失礼な態度取ったっけ？」

取ったじゃん・・・・。

って事で、次は感動のエピローグ！

エピローグ

こうして、事件は解決をし、舞台の幕を閉じた・・・。
ジュン：「おはよう、裕一君。」
裕一：「お、おう。」
ジュン：「朝食取ったら、滑りに行こう？」
裕一：「あぁ、そうだな・・・。」
ジュン：「ねぇ、元気無いよ？
どうしたの？」
そりゃそうだろう？
だって、一番の知り合いが殺人犯だったんだから・・・。
ジュン：「あ、そっか・・・。
裕一君、次郎さんが犯人だったから悔やんでるんだ。」
裕一：「バーロ、そんなんじゃねえよ。」
ジュン：「じゃあ何？」
裕一：「これからの事を考えてたんだ・・・。」
ジュン：「これから？」
裕一：「あぁ、これから先、今日みたいに事件に巻き込まれるのかなって・・・。」
ジュン：「何言ってんの？
そんな事言ってたら、探偵は務まらないんじゃなくて？」
裕一：「それもそうだな・・・。
よし、朝食を取って滑りに行こう！
今日は滑りまくるぞ？」
その後、二人は朝食を食べに食堂へ行き、スキー場へ行っていっぱい滑りました・・・。
そして、東京へ帰り、いつもの生活に戻ったのでした・・・。
裕二警部：「おぅ、お帰り・・・。
どうした、彼女とのスキー旅行は？」

裕一：「彼女じゃねえよ！
まぁ、スキー旅行の方は、事件とか色々あったけど、それなりに楽しかったぜ。
親父、ありがとな・・・。」
裕二警部：「なぁに、気にする事ねえや。」
裕一は、自分の部屋に入り、ベッドにそのまま横になった・・・。
そして向こうは・・・。
秀一：「あ、お帰り。
どうだった、裕一君とのスキー旅行は？」
ジュン：「色々と事件に巻き込まれたけど・・・結構楽しかったよ。
それに、裕一君の中学時代の友達にも会ったし・・・。」

エピローグ（後書き）

一応、これで2殺目は終了です。
また、次回の事件も考えてありますので、その時は宜しくお願いします。
次回作は、ウケは一切無しでいきたいと思います。（ツッコミはしますが・・・。）
裕一：「それをウケ狙いと言うんじゃないのか？」
あひゃっ・・・うへっ・・・。
いや、何の事かなぁ？
裕一：「とぼけるな！
じゃないと・・・。」
ジュン：「あたしの回し蹴りを喰らわすわよ？」
ふっふっふ・・・。
作者の俺は神同等だ。
やれる物ならやってみやがれ・・・。
すると、「ヒューン」と、回し蹴りが飛んできた。
しかし、作者には当たらず、裕一の顔面に直撃した。
ジュン：「あ、ごっめーん。
何か、神同等とか言ってる作者さんのせいで当たっちゃった・・・。」
ふっ、愚かな。
ジュン：「あ、いや。
御免。
本当は、私が故意に当てました。
裕一君、御免なさい・・・。」
って事で、サイナラ！
ジュン：「こら待て！
てか、勝手に人を操ってんじゃねー！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6040a/

河野裕一の事件簿　2殺目

2010年10月28日05時51分発行